

## イギリスの大学ダンス教育に関するインタビュー調査

### Study on dance education in United Kingdom

尚美学園大学 三輪 亜希子  
MIWA Akiko

名古屋女子大学 豊永 洵子  
JUNKO TOYONAGA

#### [ 英文抄録 ]

The purpose of this study is to research new method of dance education. I went to the United Kingdom to study dance education. I interviewed Japanese dancers who has experience of belonging to a dance course or a dance department at a UK university, and university educators. By continuing this study, I want to introduce a new viewpoint of subject contents to Japan. As a results,by referring to specific setting and achievement goal of education subjects in the UK, We may be able to introduce a new viewpoint on subject design of dance education in Japan. In the next research, the new purpose is deep understanding about the design of evaluation standard of the dance education. By doing so, We may be able to support the development of thinking skills and creativity through dance.

#### [ 和文抄録 ]

現在、日本の大学教育機関にて実践されている舞踊教育の中で、今後活かすことの可能な科目内容や指導方法の具体的な導入を検討することを目的に、舞踊教育機関の制度が整ったイギリスにてインタビュー調査を行った。対象は、イギリスの大学で舞踊コースあるいは舞踊学部に所属をした経験のある日本人ダンサーと、現在指導を行なっている大学教員とした。筆者は、日本における大学の舞踊教育に携わる立場としてこの調査を継続し、論としてまとめることに留まらず、具体的な科目導入へ繋げていく実践的な取り組みを目的としている。

結果として、国による教育制度の違いからカリキュラム全体に通じる教育プログラムを参照することは難しいが、具体的な科目の設定やその達成目標を参照することで、日本の大学におけるダンス専門科目の科目設計に関して新たな視点の導入を狙える調査となった。今後の課題として、ダンス教育から習得を狙うことの出来る思考力や判断力の育成を見越し、科目の方針と評価基準の設計を目指した追調査の重要性が見出された。

キーワード：ダンス, 科目設計, 日本のダンス教育の課題

## 目次

1. 背景・目的
2. インタビュー調査の概要
3. 調査結果の考察
4. 結論
5. 今後の課題と展望

### 1. 背景と目的

近年、日本では、中学校でのダンス必修化や習い事の上位ランキングへの浮上、テレビコマーシャルでの多様な導入など、ダンスの関心は高まりを見せている。またその波を受け、大学教育でもダンスコースを構える大学が少しずつ増えてきている傾向にあり、一方、学生側も、ダンス経験の有無に関わらず、大学教育機関にて専門的にダンスを学びたい欲のあるものが増加している。しかしながら、卒業後の進路としてダンサーというキャリアへ結びつく可能性は極限られた数名のみであるという現状は変わらない。そこで、舞踊を学びながらも社会性を養い、アテンダントやプランナーという表現力や企画力を活かした仕事へキャリアを繋げていくなど、その教育機関の目指すべき指導方針の具体化が求められる。一方、日本に留まらず、アメリカ、イギリス、韓国等、どの国においてもダンス教育の方針を建設していくことは課題が多く、難渋しているという声を聞く。国や文化の違いから同じ教育プログラムを運用することは不可能に近いといえるが、教育という広義の中でその方針を参照し合いながら、人材育成に繋がるダンス教育のあり方を見出していくことは可能ではないだろうか。この調査では、大学におけるダンス教育での指導は何を目的とするべきかという大きなテーマを掲げながら、実態調査を進め、その結論を科目内容に具体的に導入していくことが目的である。

この度の調査は、2017年7月1日～9月7日の期間内に実施し、イギリスの大学にて舞踊コースあるいは舞踊学部にも所属をした経験のある日本人ダンサーと、現在指導を行なっている大学教員を対象に行った。前者へは、留学を選んだ理由から現在の活動に通じる学びに関して、後者へはカリキュラムに関する内容や教育者としての姿勢に関して、履修者の視点と指導者の視点それぞれに聞き取りを行った。インタビュー内容と回答の報告として本稿をまとめることとする。

### 2. インタビュー調査の概要

#### 1) 調査対象

調査対象1：イギリスの大学にて舞踊コースあるいは舞踊学部にも所属をした経験のある日本人ダンサー3名

調査対象2：現在指導を行なっている大学教員3名

表1. 調査対象1の詳細（イギリスの大学にて舞踊コースあるいは舞踊学部にて所属をした経験のある日本人ダンサー）

	インタビュー日時・場所	在籍した大学名	現在の活動
ダンサーA	2017年7月1日・北千住（日本）	Middlesex University	日本にてダンススタジオ経営及び指導者
ダンサーB	2017年8月28日・パディントン駅内（イギリス）	Trinity Laban Conservatoire of Music & Dance	イギリス及び日本にてダンサー
ダンサーC	2017年9月5日・オックスフォード駅内（イギリス）	Chichester University	イギリス及び日本にて振付家・指導者

表2. 調査対象2の詳細（現在指導を行なっている大学教員3名）

	インタビュー日時・場所	所属する大学名	専門科目
指導者A	2017年9月2日・ミドルセックス大学内（イギリス）	Middlesex University	舞踊教育、振付法
指導者B	2017年9月4日・チチェスター大学内（イギリス）	Chichester University	振付法
指導者C	2017年9月4日・チチェスター大学内（イギリス）	Chichester University	舞踊批評

## 2) 調査方法

半構造化インタビュー及び大学見学

## 3) 調査期間

2017年7月1日～9月7日

## 4. 調査内容

調査対象1、2それぞれの立場に合わせ別の質問項目を設置した。

- ①調査対象1への主な質問項目：留学を選んだ理由、在籍した大学を選んだ理由、日本の教育と差異を感じた内容、履修してキャリアに繋がったと感じる科目内容、現在の活動の方針と課題
- ②調査対象2への主な質問項目：ダンス教育の科目内容を活かしてどのような人材育成を実施しているか、学生の傾向、MA取得はダンサーとしてのキャリアに必要なか、プロダンサーの養成が学士の目的であるか、ダンスの専門科目の有効性

## 3. 調査結果の概要と考察

インタビューの調査は、質問及び回答の脱線を許し、準備段階では予測のつかなかった新たな視点への回答を促す半構造化の姿勢を取った。そこから聞き取れた内容について以下に考察を進める。

### ①ダンスを軸にした将来設計

ダンサーAは、留学を選ぶ際に、すでに大学卒業後の活動を視野に入れていた。幼少期から続けていたクラシックバレエについて、そのままバレエダンサーとしてのキャリアを積むことは身体的な条件などから厳しいと自己判断をしており、しかしながら長年

続けてきたバレエを通じたダンスキャリアを用いて仕事を開拓していきたいという考えを持っていた。そこで、ダンス教育の制度が整うイギリスの大学への進学を検討したという。ダンサー A の在籍した大学では、例えば、ダンス学部の中に、Study（指導）、Sience（医療やセラピー）、Performance（振付や出演）など、卒業後の目指すキャリアを元に分類したコースに細分化され、それに適した科目設置がなされている。必ずしも明確な将来設計を持って入学する学生ばかりではないというが、ダンサー A は、「大学に来る時点で先を見て入学」したという。

## ②大学の選択肢及び情報機関が明確

プロダンサー養成が目的の大学であるかという質問を投げかけた際に、指導者 A は、以下の回答を述べた。イギリスでダンス教育を学ぶための大学を選ぶ際に、プロダンサーを目指すものと学術的な学習を求めるものと、それぞれに基金が異なり、求められている役割が社会に置いて異なることが明確であるという。前者は Hight art foundation に属し、後者は、Hight education foundation に属す。こうした助成システムの変化により、学生の傾向も変わってきていると指導者 A は述べる。指導者 A は、こうした制度の明確さが国内外からの受験者にとってのメリットであり、この点を日本へ導入することは文化の違いから不可能ではないかと示唆している。また、ある大学の情報室では「アートに関する求人情報やオーディション情報、ダンスカンパニーの活動記録などが網羅されているサイトがある」とダンサー B は述べ、卒業後も大学機関をその情報収集のために利用出来る場として認識していたが、日本に戻り活動を始めた際にどこで情報を収集して良いか見つけられなかった点を指摘している。前述の情報サイトは、その大学に所属していなくても「会員になると誰でもアクセスが出来る」システムであるとダンサー A からこのシステムについて、回答を得た。このように、日本では一般的に就職活動支援として使われているようなサイトや情報ツールが、イギリスではアートやダンスの領域にも確立している。

## ③ディスカッションに対する能力

ダンサー A は、イギリスでの科目の中で、度々学生同士のディスカッションの時間が設けられていたことに入学当初は日本の教育スタイルとの違いを感じたという。授業の中で、何故そのように答えたのか、ダンス作品に対してどういう風に見えたのか、自分がどう感じたかを発言する機会が多くあったという。この点については、ダンサー B も同様のことを述べており、「クリティカルシンキングを持って、自分のことを客観的に見ながら意見をいう」機会が多くあったという。その点については、例えば大学の授業に限らず、幼少期からの育ち方で培ってきたように見えたダンサー B は述べる。指導者 A もまた、この内容に繋がる回答を言及しており、例えば、「作品の中でロマンティズムを踊っているのにバレリーナがロマンティズムを理解していない場合も多く、ダンサーは、国語や数学以外の教養を学ぶ必要が深い」と述べる。そのために大学があり、プロダンサーを育成する機関でも学士を出せるようにイギリスの制度が整ってきた。ダンス教育と教養教育の融合が方針として明確であり、大学での学びの中で、ダンスに関して語れる力が重要視されているのではないだろうか。

#### ④評価基準をどこに置くのか

教育機関でダンスを科目として取り上げる時に、基準として考えるべきことの一つに実技の評価をどう判断するのかという視点がある。指導者 A は「芸術教育の中で主体となる評価は、watching（分析や批評など論として書き出すもの）と捉えることが基本。しかし、doing（パフォーマンス）や making（振付・演出）もダンス教育のアカデミズムとすることが出来、作品を作ることや踊ることを評価するのもアカデミズムの中に置ける要素だと捉えられる」と述べる。そのために、ダンスそのものの学びとそれを取り巻く他の文化、歴史、教養の学びを合わせ、教育の構図をどのように設計するのが大切な視点ではないかと指導者 A は分析している。ダンス教育の評価基準を設計するためには、その周りに配置される教育プログラムとのバランスを吟味していく必要が高いという視点であろう。指導者 A は、例えば、日本での教育の中で扱われる音楽教育は、クラシックを軸にしている場合も多く、自国の文化ではなく西洋の文化を用い、伝統的な学びという視点からは外れているのではないかと述べる。つまり、ダンスの場合も文化や歴史、教養との関係の中で学ぶという視点が持ちにくいのではないかと指摘する。この観点を明確にすることで、ダンス教育の評価基準が導き出され、学生のどのような能力を評価として見出していくのかという設計が見えてくるのではないかと、指導者 A の回答から示唆した。指導者 A は、教育者側が「学生にどういう視点を持って欲しいのかという基準を定めることで、自ずと指導者の判断基準も決まる」と述べる。

#### ⑤指導者の姿勢

指導者 A は、④の評価基準に加え、何が教育であるのかを教育者自身が方針として保持していることの重要性を述べる。情報を知ることでも教育であり、知識を使って周りとの協同することも教育に含まれるとし、ダンス教育においても、知覚とコミュニケーションの両方が教育として成立し得るといふ。この中では、芸術としてのダンスの存在が希薄にはなるが、評価基準を定める教育の中で学ぶダンスの価値が明確になる点も指導者 A は見越していた。例えば、「コレオグラフのコースの中で、あまり面白い中身に到達しなくとも、チームがうまくいってれば高い評価とするのか」、そうした指導者側の判断の確定により、指導方針が変わってくるのではないかといふ。ダンススキルの上達も達成目標として明確な目的となり得る。そこで、ダンススキルの上達を通してコミュニケーションの能力を育むという育成方法は、目的が2つある状態ではないかと指導者 A は指摘している。

## 4. 結論

この度の調査は、限られた大学数とインタビュー対象者数での実施である。そのため、イギリスのダンス教育を包括的に捉えた結果としての資料とはならない。しかしながら、現在の動向を理解し、指導者個々がどのような視点で現場を捉え、教育方針を固めながら指導を行なっているのかということについて具体的な考察を行うことができた。例えば、ダンサー B は、「ロンドン（の大学）である程度学ぶと、（創作や即興表現というダンスの現場で使われる）共通言語が出来る」と述べており、ここでいう共通言語とは、ダンス教育で習得する共通の能力や視点、方式であり、日本のダンス教育では曖昧にされている

点も多い。その曖昧さが学習者の独自の観点を育てるといったメリットもあるが、曖昧さゆえにダンス教育への社会的理解が得がたいことへも繋がっているであろう。例えば創作課題という科目の一つ取っても、科目設定の基準は、各大学内の指導者の経験や視点に任される傾向にある。今後の学習者がダンスジャンルを超え、国内外を視野に入れた学びを求めて大学進学を目指すであろうことを見越すと、ダンス教育においては演出方法や振付方法といった具体的な指導プログラムの基準設計が重要ではないだろうか。その具体的な設計が、ダンスを通して何を学ぶのかという問いの答えを生み、ダンス教育の価値に繋がるのではないかと考える。

## 5. 今後の課題と展望

今後は、イギリスのみでなく、アジア圏やアメリカの教育プログラムも視野に入れ、大学におけるダンス教育での指導は何を目的とするべきかという大きなテーマに関する継続的な調査を進めることが一つの課題である。また、振付方法や音楽とダンスを融合した創作課題など、具体的な科目における達成目標や効果、指導方法を調査し、ダンサーの養成とダンスを通じた社会性の獲得という二つの目的を分離しながら、指導スタイルを確立していくことを発展させていきたい。この点については、国内の実態調査も合わせて行い進展させていく計画である。ダンス教育における評価基準と達成目標をどう設計し、どう判断していくのか、ダンスの専門科目の中での教育設計を組み立てることを念頭に置きながら研究を進めることとする。

## 参考文献

- 大貫秀明 「「ダンス」領域のポリティクス：イギリスのダンス教育事情に照らして」、体育・スポーツ哲学研究、2004
- 片岡康子 「日本の大学におけるダンス教育」、演劇人、1998
- 畑野裕子 「米国の大学におけるダンス教育カリキュラム」、『実技教育研究』第9巻、兵庫教育大学実技センター、1995
- 三浦弓杖 矢島ますみ 「舞踊教育再構築（7）日本における舞踊教育の可能性、21世紀のダンス教育の在り方」、千葉大学教育学部研究紀要、1999
- ムラリ ピルエッタ 「海外STUDY 考えるアーティストを育てるフィンランドの大学ダンス教育：フィンランド・シアター・アカデミー舞踊学科」、地域創造：町づくりを応援します、2006